地域連携プロジェクト（岡垣町・九州共立大学）
地域活性化
岡垣歴史新聞
制作・編集・発行
岡垣町・九州共立大学　地域連携
『岡垣歴史新聞』
プロジェクト編集委員会
（九州共立大学内）
代表　山田　明
〒807-8585
北九州市八幡西区自由ケ丘1－8
093－693－3403（山田明研究室）

巻頭言
『岡垣歴史新聞』プロジェクト

九州共立大学　山田　明

二〇一五年八月十一日、九州共立大学（以下、本学）と岡垣町は「包括的地域連携に関する協定書」に調印しました。双方にとって初めての地方自治体と大学間での包括的な協定の締結です。岡垣町と本学の教員及び学生が知識や経験を生かし、お互いの課題解決や地域活性化のために協働することが目的です。今回、本学の学生が歴史と自然の町として知られる岡垣町でのフィールドワークや地域の方々への聞き取りを通し、地域活性化に貢献する新聞（岡垣歴史新聞）を作成しました。この小紙で多くの岡垣町民のみなさんに町の歴史や魅力を再発見していただき、まちづくりの取り組みの一つにしていただければ幸いです。まちづくりは、地域にすでに存在している資源を活用して新しい価値を作り出そうとする活動とその成果だとも言われています。その視点からみると、身近にある地域資源、例えば豊かな自然や歴史を次世代に伝えていくことが重要だと思います。今回の地域活性化新聞を、小中高校生のみなさんにも読んでいただき、郷土愛に満ちたまちづくりの担い手になっていただきたいと思います。

岡垣歴史新聞の発刊に寄せて

岡垣町長　宮内　實生

岡垣町では、町の特性を生かした教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策として、平成二十八年三月に「岡垣町教育大綱」を策定しました。この教育大綱は、基本理念を「〝輝き〟〝誇り〟〝つながり〟～地域を拓く　学び、つながるまち　岡垣～」とし、この基本理念のうち〝誇り〟は、町民が郷土愛を深め、ともに誇りあるまちをつくり、支え合う社会をめざすという意味が込められています。

今回、発刊された岡垣歴史新聞では、町を代表する風景である三里松原のほか、地域のみなさんもご存じないような町の歴史も記事にされており、郷土である岡垣町の長い歴史の一部が垣間見える内容となっています。この岡垣歴史新聞により、町民のみなさんの郷土愛が深まり、更に岡垣町に住み続けたいと感じていただけることを期待し、お祝いの言葉といたします。

岡垣町のシンボル　三里松原

湯川山から（図録 岡垣の文化財Ⅰ 1996. P166より）

玄海国定公園は、こうもり傘をひらいたような形をした海岸線にある。かつてここには、数百年をかけて育てられた松が青々と繁り、白砂青松の海岸と言われてきた。虹の松原、生の松原、百道松原、千代の松原、三里松原と筑前の海岸に松原の帯を作っていた。この松原には縄文時代の太古より人々が居住してきた歴史を持ち、『筑前国続風土記』にもその記載がある。広大な自然と古い歴史を持つ岡垣町を代表するスポットである。松の植え立てが本格的に行われるようになったのは、江戸時代になってからのことである。幕藩体制が確立すると、幕府も藩も財政確立のため米の増収をはかる。黒田藩も遠賀川下流の堀川工事、筑前の海岸一帯での防風・防砂林としての松の植え立てなどもそのためであった。だが、戦後の射爆撃場（演習）用地としての活用、高度成長期の自動車の往来やレジャーとしての利用などが岡垣から緑を奪ってきた。今の三里松原は、枯れ木が多く目につき、歩いてみるとゴミも散乱している場所があった。また、松くい虫などの虫による被害がある。毎年五～六月ごろヘリコプターによる薬の空中散布が行われているそうだ。真夏の午後、燦々と輝く太陽のもとで取材をしながら、海と空の青さに負けないように海岸を青々と埋め尽くす三里松原を再び見たいと思った。そして、この岡垣を象徴する松原を次世代に引き継ぐためにも、地域社会の総力で再生してもらいたいと切に感じた。（川宿田和未）

松原（図録 岡垣の文化財Ⅰ 1996. P166 より）

玄海国定公園に含まれ、全長は約6キロ、幅は最大で約1.3キロ、総面積430ヘクタールの広大な松原。古くは「垣崎の松原」などとも呼ばれていた。歴史は神功皇后の伝説までさかのぼるが、今から800年ほど前までは、この地はまだ鳥取砂丘のように砂ばかりであった。それが砂や風・塩害から農作物を守るため、江戸時代から本格的な松植が始まり、多くの人の手厚い保護を受けながら、現在の風景を作っていった。

（岡垣町HPより）

＊参考文献
岡垣歴史文化研究会年報『木綿間』第十九号（平成十一年三月）、二四～三十頁。

【三里松原を愛し守る会】の活躍！

岡垣町を代表する自然景観であり、悠久の歴史をもつ三里松原。住民や農作物を守ってきたこの松原が今、危機的状況です。その松原をボランティアで後世に引き継ごうとする団体「三里松原を愛し守る会」が活躍しています。みなさんも参加しては如何でしょう。

＊とき
毎月第二火曜日・第四土曜日
午前九時～十一時
＊活動内容
雑木の伐採や雑草の除去、松葉かき、松くい虫に強い松苗の植樹
＊問い合わせ
代表（平井）☎二八二―一六三三

『海蔵寺の木造馬頭観音坐像』

私は九州共立大学経済学部で学んでいるグェン・ティ・ゴック・アインです。ベトナムからの留学生です。今回の取材で、岡垣町にある「海蔵寺」を訪問し、「木造馬頭観音坐像」という仏像を拝見しました。この仏像は今から約六百年前に造られたもので、頭上に馬が乗っています。それは馬を邪鬼などから守るためだそうです。そのため、左手に斧を持ち右手には棒を持っています。昔は馬が大切な動物であり守る必要があったようです。馬は人を乗せたり、物を運んだり、戦いのときも使われていました。そのような馬を仏様で守ろうとしたのでしょう。私の母国ベトナムにも仏像があります。ベトナムの仏像は色が明るく、色々なサイズがありますが大きなものが多く、また見学するところから離れた場所に安置してあります。しかし、今回見学した日本の仏像の色は年代が古いせいか黒く見え、また近くで見ることが出来ました。日本とベトナムの仏像は違う所もありますが、両国の仏像の中には共通に怖い顔をしている仏像もあります。そこで、私は、なぜ怖い顔なのか考えてみました。それは邪鬼や色々な悪いものから動物や人を守るためだと思います。仏像は、神秘的な存在で、高い位置に置かれているので、怖い顔も威圧感があります。日本のお寺で、大切な仏像を見ることが出来て、心が穏やかになりました。そして故郷であるベトナムのお寺で見た仏像のことを少し思い出していました。（グェン・ティ・ゴック・アイン）

海蔵寺本尊（編集部撮影 H28.8）

海蔵寺本堂（編集部撮影 H28.8）

海蔵寺門前
（編集部撮影H28.8）

湯川山のふもと、内浦にある海蔵寺は、1333年（正慶2年）に大暁禅師により開山され須藤駿河守行重により再興された臨済宗大徳寺派の寺院。ご本尊は木造馬頭観音坐像で県の文化財に指定されている。

（岡垣町HPより）

戦国の城は今！

三吉城（竜王山城）

三吉公民館から三百メートルほど山裾に上ると山崎神社があり、その背後の竜王山に城址がある。頂には現在、わずかな人工削平地と帯曲輪が残っている程度である。『宗像追考記』には、「三牧郡三吉城、船手より襲来時の押さえの為に取立む」とあり、手野城とともに、宗像氏の本城、蔦ケ岳城（城山）を防衛する目的で築かれたものと考えられる。昔の岡垣は、三吉、手野、内浦にかけて海が近くに控えていたため、その地理的重要性は非常に大きかったのである。（山田明）

＊参考文献
廣崎篤夫著『福岡県の城』海鳥社

三吉城跡（編集部撮影 H28.1）

手野城（雨乞山城）

手野城跡（編集部撮影 H28.1）

手野の集落より五百メートルばかり南、城原山の頂上が城址である。南北に長く、長方形の形をした台地である。戦国時代（十六世紀前半）、岡垣に隣接する宗像を支配した宗像氏が北の押さえとした防衛のための砦という。『遠賀郡誌』、『宗像追考記』によれば、宗像の本拠地であった蔦ケ岳城（城山城）は難攻不落の要害であったので、敵が攻め込むのは岡垣の海側であろうとの推測によるものであったようだ。但し、普請奉行や農民の反対により築城はできず、仮の城として、番人を置いて守らせていた。この手野城は、またの名を雨乞山城ともいうそうである。現在は、この地に大国主神社があるが、地域の農民の人の祈願が行われた場所であったのだろうか。手野は戦国時代の岡垣の重要な地であった。この神社について、フィールドワークをして感じたことがある。神社の敷地がかなり広い平地であること、城に上がる入口にあたることから、城の主の居館跡、または防御のための施設ではなかったということだ。戦国時代の城とその近接地域にある神社は一体化したものが多い。そう思えるほど大国主神社は広大である。（山田明）

＊参考文献
廣崎篤夫著『福岡県の城』海鳥社

岡城址

岡垣町には、現在公園として整備されている中世の城址がある。岡城と呼ばれる山城である。最初に城と聞いた時、大阪城などの大きなお城を想像したが、実際には山と言っても大体三十メートルくらいの高さの山にせいぜい二十～三十人が入るのが限界の建物が建っていてそれを城と呼んだらしい。この山城は近代にできたお城とは違い普段は見張り役の人が交代で何人か住み、海の方から攻めてくる敵を監視したり、戦の時に城に立てこもって戦ったりするためのものであったようだ。三十メートルくらいの山の小さい建物で戦っても簡単に負けてしまうのではないかと思ったのだが、敵が頂上にすぐにたどり着けないように道をジグザグにしたり、土塁を作って敵が一度にまとまってこれないようにするなどの工夫がされていた。実際に歩いて登ってみたところ、頂上にたどり着くまでに意外と時間がかかり体力も消耗した。頂上からは海の方が綺麗に見えた。見張り台としても防衛のためのお城としてもしっかりと役に立っていたのだろうなと感じた。この岡城には城主の麻生隆守とその家族のお墓がある。このお墓は戦に敗れて山奥の寺に逃げ込みそこで自刃した麻生隆守とその家族を供養するために作られたということである。山の下の方には隆守院という麻生隆守の菩提を弔うために建てられた寺院もある。今回、岡城や麻生隆守に関係するところを取材のため資料を片手に現地を訪れ、麻生隆守とはどんな人物だったのかなどと過去に想いを馳せた。頭の中だけだが、タイムスリップしているようでとても楽しく感じた。（中西寿明）

＊参考文献
岡垣歴史文化研究会年報『木綿間』第二十一号（平成十四年三月）、二一頁。

岡城よりの遠望（編集部撮影 H28.1）

岡城　頂上への道（編集部撮影 H28.1）

麻生隆守の墓（左）（編集部撮影 H28.8）

注目！ 岡城に新しい学説

町民による劇・「岡城落城悲話」でも取り上げられたり、市販の城郭関係本にもよく掲載されているのが、岡城（岡城址）である。

町内の城址では、最も良好な状態で遺構が残り、町の文化財に指定されている。

この城は従来から戦国期に築かれたもので、麻生隆守という人物が城主の時に敵（大友宗麟）の攻撃を受けて落城、以後使われることなく、城としての役割を終えたと言われていた。

ところが最近になって、城郭研究家の中村修身氏がこの城の新しい学説を唱えておられる。

それは、この岡城は麻生隆守が居城としていた戦国期の城ではなく、江戸期の初め、吉木の集落に隠居屋敷を構えた井上之房（井上周防）が、有事の際の詰城として築いたというのである。

そして麻生隆守が居た城は、すぐ近くの別の小山に在ったというのである。

中村氏は、黒崎城の城主だった井上之房が、江戸幕府の一国一城令で黒崎城を破却した後、念のための防衛施設として、隠居屋敷の背後にセットで築城したものだと言われている。

今日、吉木の集落を訪れると、岡城の在った小山、そして隠居屋敷の跡地、跡地横の隆守院が一つの区画を形成している。

その上、熊野神社から三福寺にかけての町並みは城下町のような風情を強く感じさせる。これは、あたかも井上家の小城下町であるかのようだ。

岡城の新たなる着目点が発信された。

＊文責
九州女子短期大学・非常勤講師　三浦明彦

＊参考資料
「北九州・京築・田川の城」中村修身　花乱社
「福岡県の城」廣崎篤夫　海鳥社

岡城址（左右に土塁が確認できる）（編集部撮影 H28.8）

吉木の町並み（城下町を思わせる町並み）（編集部撮影 H28.8）

法應寺・宗家発祥伝説

平知盛像（山口県下関市）（編集部撮影 H28.5）

岡垣町の内浦に古刹・法應寺という寺がある。実はこの寺の境内に一つの古墓があり、その墓の主は平知宗と言われている。

平知宗、名前から察してお判りいただけるだろうが、ご存じ平清盛の一族、つまり平家一門である。詳しくいうと清盛の四男・平知盛の息子ということなのだが、つまり清盛の孫ということになる。

歴史的な話をたどると、平安時代末期、源平合戦・壇の浦の戦いで、平家方の副将・平知盛は、奮戦するも味方の敗北を悟るや、船の大碇を自らの身体に巻きつけ、関門の海に沈んだとされる。

その知盛には、知章（長男）・知忠（二男）・知宗（三男）の三人の息子があり、中でも知宗は壇の浦の敗北後、この内浦の地に潜伏し、世を終えたとされる。

一方知宗の子孫は、遠く対馬に移り、武士団の頭となり、家を興した。そして、その家名を宗とした。すなわち対馬の領主・宗家の始まりとされる。いうまでもなく、宗家の「宗」は、知宗の名の一文字「宗」を取ったものである。

対馬の領主となった宗家は、鎌倉時代ともなると、対馬の守護代を務め、豊臣秀吉の頃には近世の大名として認められた。

法應寺本堂（岡垣町内浦）（編集部撮影 H28.7）

対馬宗家始祖・平知宗の墓（法應寺境内）（編集部撮影 H28.7）

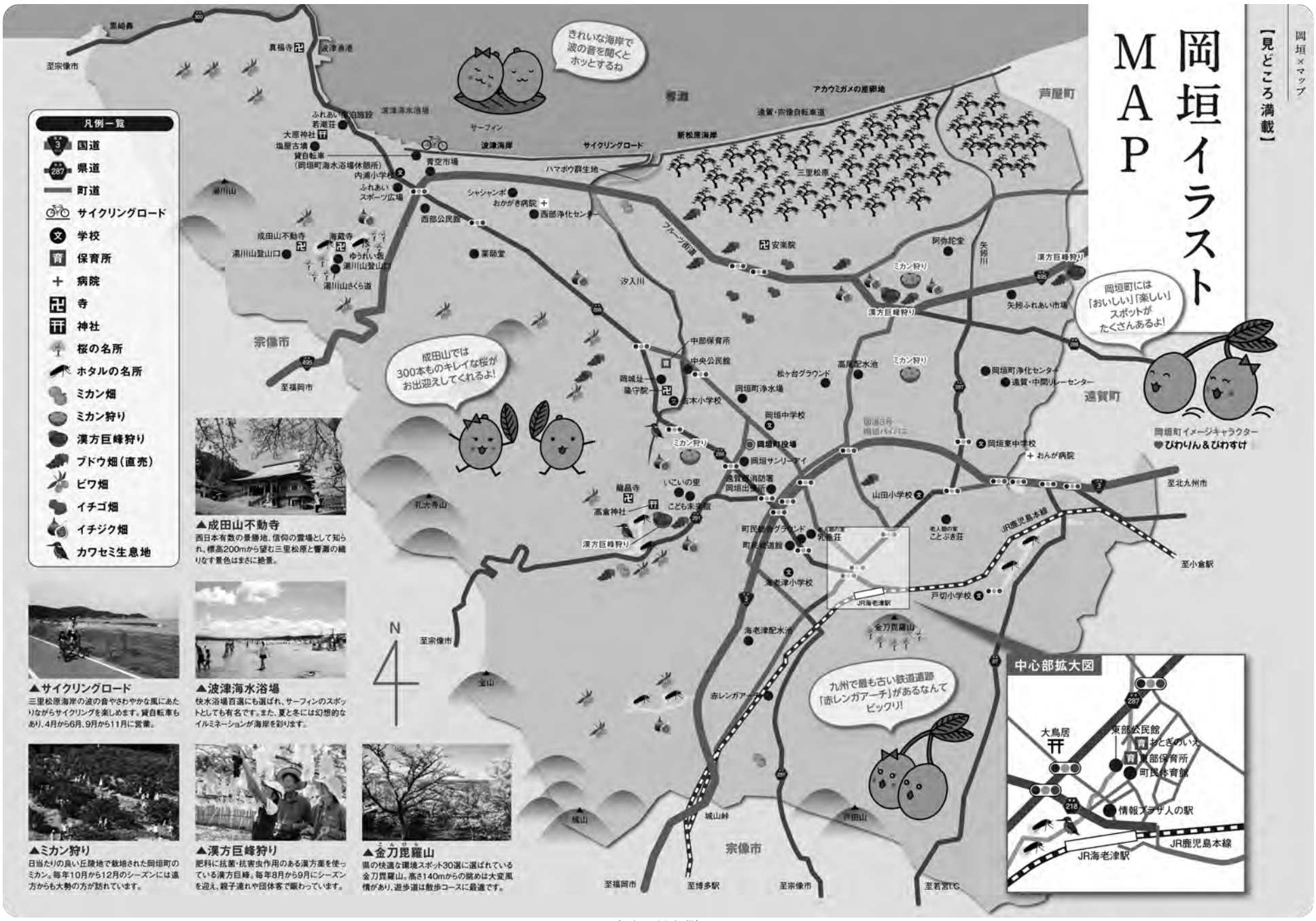
やがて江戸時代ともなると、対馬藩（厳原藩）の藩主となり、一〇万石格の中堅大名となった。

対馬藩は、朝鮮通信使の接待・案内の功労によって三年に一回の参勤交代が許され、さらには朝鮮への貿易船の派遣が認められた、江戸時代において対外通商のできる唯一の藩となった。

ところで、対馬藩・宗家の家臣が藩主の代わりに毎年法應寺に墓参に来ていたという話がある。いわゆる藩主の代参であるが、これが繰り返し行われたのは、一重に法應寺に宗家発祥の人物が眠るからであろう。

最後に一言添えると、宗家歴代当主の中では、元寇の際、対馬を守って戦った「宗助国」と江戸時代初期、朝鮮との国交修復に貢献した「宗義智」が特に著名である。

＊文責
九州女子短期大学・非常勤講師　三浦明彦
＊参考資料
「平家伝承地総覧」　全国平家会
新人物往来社
「日本武将一〇〇選」　和歌森太郎
秋田書店
「日本大名一〇〇選」　桑田忠親
秋田書店



（岡垣町より提供）

町民のみなさん、ご存じでしたか？

毘沙門天立像（個人撮影 H20.10）

神功皇后伝説にまでさかのぼる古い縁起を持つ高倉神社は、旧遠賀郡18か村の総社として古くから信仰を集めている。その社の中、堂々とした社殿を持つ境内は、今も岡垣町民の大切な場所である。毘沙門天立像は、県指定文化財（平成28年2月11日から平成32年3月末まで不在）。

（岡垣町HPより）

高倉神社の立像の所存

台座のみ（編集部撮影 H28.8）

高倉神社の社宝でもある毘沙門天立像が、現在、九州国立博物館に修理・補修・調査等で移されていることをみなさんはご存じだろうか。私は、事前に高倉神社について書いてある文献や資料に目を通して訪れたのだが、像がなく台座だけ残っていたので大変驚いた。さて、この毘沙門天は延徳三年の銘文のある芦屋鋳物師の作品で、もとは龍昌寺にあったそうだ。毘沙門天は四天王の一つで多聞天とも言われている。手野の薬師堂にある多聞天のように殆ど木造が多い中で青銅鋳造物はきわめて珍しい作品である。高倉神社が芦屋鋳物師の産神となっていたためだろう。製作者は大工の大江貞盛で、高さは二メートル二十七センチもある。このような巨大な鋳造物を作ったのはなぜだろうか。私は取材しながら、岡垣の町を見守るための象徴（存在）として力強い像が必要だったのではと思った。同じく社殿左側にある綾杉は約七百年樹齢かと推定され、神功皇后が自らお手植えされたという伝説も残っている。そのとき、苗木を逆さまに植えられたので「逆さ杉」とも呼ばれ神木としてあがめられている。高倉神社の毘沙門天立像や逆さ杉などとても貴重な文化財を持つ岡垣町。岡垣町民のみなさんが折に触れてこの神社を訪れ、文化財を鑑賞されては如何であろうか。

（川宿田和未）

＊参考文献
岡垣歴史文化研究会年報『木綿間』第二十一号（平成十四年三月）、二二頁。

高倉神社本殿（編集部撮影 H28.8）

東向山 隆守院

隆守院　表札（編集部撮影 H28.8）

岡城主麻生隆守の霊を供養するために、一六五三年（承応二年）に建てられた曹洞宗の寺院。

＊木造胎蔵界大日如来像／町指定文化財

隣にあった勝業寺の本尊として祀られていたが、明治維新のときに廃寺となったため隆守院に安置されたものである。膝裏の銘により、一五一七年（元亀二年）に造られたことがわかり、一六世紀の岡垣町の歴史を知るうえで貴重な資料である。

（岡垣町HPより）

摺墨（するすみ）伝説

（さし絵 岡垣町教育委員会『岡垣町伝承民話集』1995.P25-26 より）

この伝説は鎌倉時代を開いた源頼朝の愛馬の摺墨が梶原源太景季に与えられ、宇治川の先陣争いなどで活躍して天下にその名を知られたというものである。この摺墨はその名の通り墨のように黒い馬で、どこで生まれたかについては多くの説がある。岡垣町の湯川山という山にも摺墨の伝説が残されている。元々、湯川山には牧場があり、多くの馬が飼われており、その中の一頭が摺墨であるのではないかと言われている。摺墨は気性の激しい馬で周りの馬からは仲間はずれにされていたが、権じいというひとりぼっちの年寄りには懐いていた。しかし、源頼朝に献上され、権じいとは離れ離れになった。そして摺墨は梶原源太景季に与えられ、最期は駿河孤崎の合戦で矢傷を受け虫の息になりながらも権じいに会いたいがために血を吐きヨロヨロとした足取りで春日神社の前あたりまで戻ってきたがそこで動けなくなり死んでしまったと言われている。短くまとめたが、この湯川山に伝わる摺墨伝説を聞いている時、私は、権じいと摺墨がどんな気持ちだったのかを考えて可哀想だと思った。湯川山の摺墨伝説には合戦で活躍した後の話も描いており、本当に湯川山で摺墨が生まれたのかもしれないと思えてきた。

（中西寿明）

＊参考文献
（岡垣町教育委員会『岡垣町伝承民話集』一九九五年）

名将隆景と岡垣

小早川隆景像（広島県三原市）（編集部撮影 H28.5）

小早川隆景という人物をご存じだろうか。

戦国の名将・毛利元就の三男で、安芸国（広島県）の竹原小早川家を相続の後、沼田小早川家も併合相続した人物である。

父元就の偉業を助け、甥に当たる毛利輝元を補佐し、大々名毛利家の礎を築いたことで有名だ。

天下人・豊臣秀吉にも認められ、秀吉曰く、「数いる大名の重臣の中で、天下の政治を任せられる者が三人いる」、「それは上杉家の直江兼続、堀家の堀直政、毛利家の小早川隆景である」と言わしめている。

そんな隆景だからこそ、秀吉の九州出兵後、筑前名島城主五二万石余の大名に取り立てられている。

その上、豊臣政権の重要閣僚である「大老衆」の一人にも任命されている。

隆景が名島城主になると、現在の岡垣町の辺りも支配地となる。すると隆景は、戦乱で荒廃していた高倉神社を積極的に修復し、往時の姿に戻している。今なお、岡垣の人々に厚い信仰と深い尊敬を受けている高倉神社の救世主は隆景なのである。

隆景によって修復された高倉神社（編集部撮影 H28.8）

ちなみに隆景は、城山城（岡垣町上畑）を管理下に置き、支城として利用、番兵を入れて守らせたようである。

この城山城という城であるが、以前国道三号沿いに「城下町うどん」というドライブインが在った際に、その店舗の駐車場脇に、城山城跡を示す標柱が立っていた。

＊文責
九州女子短期大学・非常勤講師　三浦明彦

＊参考文献
「小早川隆景のすべて」　奥村徹也　他
新人物往来社
「小早川隆景」　渡辺世祐　マツノ書店

城山城跡の標柱（現在は取り除かれている）
（個人撮影 H21.9）

“はじめまして”
九州共立大学地域連携推進室です

「地方創生」の四字が日本中を席巻し、大学にも「地域連携・地域貢献」の拠点（中核）となることが求められています。そのため本学でも、平成二十七年四月「地域連携推進室」を立ち上げ、学生と教職員が協働して地域と共に立つことを合言葉に活動を始めました。

平成二十七年八月には岡垣町と「包括的地域連携に関する協定」を締結、九項目からなる「地域連携事業プラン」を策定しました。

現在、この事業プランに取り組みながら、「地域連携・地域貢献」活動の足固め・地固めを目指しています。

今後、本学が「地域コミュニティ活性化の中核的存在」となれますよう、地域連携の輪が広がることを願って、岡垣町の皆様の更なるご支援・ご教示をお願いいたします。

九州共立大学
地域連携推進室長　田中　邦博

「岡垣歴史文化研究会」紹介

一　設立年
一九七六年（昭和五十一年）、岡垣町を中心とした文化財及び郷土史の研究を目的に設立。

二　組織・会員
会員五十名、会友十三名（町議会議員）

三　現在までの活動内容
年報『木綿間（ゆうま）』発行（現在第三十四号）。
岡垣町と岡垣歴史文化研究会とで『ふるさと岡垣の歴史と文化』を発行。

四　これからの活動予定
①会員による研究発表（年二回）
②町内外の史跡巡り（年二回）
③年報『木綿間（ゆうま）』発行（第三十五号）
④町民文化祭で町内歴史の展示
⑤会員三名による『広報おかがき』への『新岡垣風土記』（月一回）を連載中。

＊「岡垣歴史文化研究会」から岡垣町住民への一言メッセージ！
縄文時代からの遺跡が残る歴史ある「岡垣」のことに興味や関心をもっていただきたいと思います。

岡垣の偉人伝

名医といわれた加藤健次医師

岡垣歴史文化研究会　入江東樹

加藤健次医師（県内の朝倉出身）は、大正六年から昭和四十四年にかけて、町内の糠塚で加藤医院を開業されていた。加藤医院の前は秋武泰雄医師が開業されていたが、門司に転居されたので、加藤医師がその後を引き継がれた。加藤医師は九州帝国大学（九大）医学部の講習会に三回出席され、研修にも努められた。忙しい開業医の立場でありながら、山田小と岡垣中の学校医としての活躍もされた。岡垣中の養護教諭をされた松井トモエさんが加藤医師のことを「医者として、岡垣だけでなく、他町村の人たちから慕われていた。先生に看取られて死にたいという人も多かった。週二回、学校に来られては、生徒の診察や保健指導をしていただいた。先生は『『学校保健の父』だったといえる」と、「岡垣中三十年史」で述べている。加藤医師は、「遠賀・中間医師会」の会長を六年間務められた。県学校保健理事も務められた。『遠賀・中間医師会史』編纂の時は編纂委員長をされ、自ら二十本の原稿を執筆された。加藤医師の功績が認められ、勲五等双光旭日章の叙勲を受けられた。加藤医師の後は二代目の勘五医師が海老津で開業され、現在は三代目の哲也医師に引き継がれている。

岡垣町文化財展示室について

ＪＲ海老津駅の近く、旧寿屋の建物を利用した施設に地域交流センターというものがある。
その地域交流センターの二階に町の文化財展示室がある。町内で発掘された土器・土師器・須恵器等、古代資料を中心に展示を行っている。
他にも町内の歴史に関係するトピックス的なことを特別展として開催している。
記憶に新しい所では平成二十六年二月から三月末にかけてＮＨＫ大河ドラマ「軍師官兵衛」に関連して「黒田官兵衛・井上周防ゆかり展」が開催された。
期間中は、町内の名刹・龍昌寺の寺宝である福岡県指定文化財の掛け軸「黒田如水像」・「井上周防像」の二点が展示され、話題となった。
ちなみに、この特別展ではもう一つの見どころとして、釈迦八相涅槃図と黒田二十四騎像の掛け軸も展示されており、町民の方々の興味関心を高めていた。
このように町民の歴史学習に一役買っているこの施設は、入館無料で、午前九時から午後五時までの開館となっている。
なお休館日は、毎週水曜日と年末年始（十二月二十九日～一月三日）ということなので、今後もより多くの町民の方にご利用願いたいものである。

＊文責
九州女子短期大学・非常勤講師　三浦明彦
＊参考文献
岡垣町文化財展示室パンフレット

地域活性化新聞『岡垣歴史新聞』プロジェクトに参加して

岡城址にて　フィールド・ワーク（編集部撮影 H28.8）

左　中西 寿明君
中　グェン・ティ・ゴック・アインさん
右　川宿田 和未さん

記事作成風景（編集部撮影 H28.8）

海蔵寺にて　ベトナムからの留学生が取材（編集部撮影 H28.8）

学生記者から一言！

＊三里松原や高倉神社などへの取材を通して岡垣の歴史を学びました。岡垣町のみなさんに、この素晴らしい自然や歴史にもっと身近に触れてほしいと思いました。また、三里松原を美しい松原に戻す活動に参加したいと思いました。
（川宿田和未）

＊海蔵寺を訪れ貴重な仏像を見ることができました。ベトナムからの留学であり、日本の歴史についての知識はあまりありません。今回のプロジェクトのおかげで歴史に関する多くの情報を得ました。私は歴史に興味をもっているので、今後他の歴史的な処に行ってみたいと思いました。
（グェン・ティ・ゴック・アイン）

＊「岡垣町ってどんなところ？」と、聞かれた時、私が記事に書いた摺墨（すみ）伝説や麻生隆守の話を少しでも思い出して話をしてもらえればうれしく思います。また、これらの郷土の歴史話を紙芝居や絵本にして子どもたちに読み聞かせるということも、次世代育成のボランティアとして有意義だと思いました。
（中西寿明）

今回、学生記者として活動に参加した

留学生インタビュー（アインさん／ベトナム・ハノイ出身）

今回の地域連携プロジェクト、地域活性化新聞（「岡垣歴史新聞」）の作成に参加したベトナムからの留学生アインさんに、日本とベトナムの歴史学習の違いや学んだ日本の歴史などについてインタビューをしました。インタビュアーは、山田明（九共大スポーツ学部）です。

＊ベトナムの学校（小・中・高）では、どのような歴史の学習をしましたか？

日本で言えば「日本史」のように、ベトナムの歴史を現代から過去にさかのぼって調べ、先生の話を聞き、歴史的な建物を見学したりしました。過去の歴史的な教訓を理解し、ベトナムの歴史にプライドを持てる学習をしました。

＊ベトナムでは、日本の歴史について何を学びましたか？アインさんが知っている印象的な歴史的事件を教えて下さい。

一つは、一九四五年八月の広島・長崎への原子爆弾の投下です。第二次世界大戦末期の人類史上発、世界で唯一核兵器が実戦使用された悲劇的な事件です。しかし、そこから立ち直った市民の力が素晴らしいと感じました。

もう一つは、日本とベトナムに関する歴史で、「東遊運動（とうゆううんどう）」です。これは、二十世紀の初めに起こったベトナム青年の日本留学促進運動です。ベトナム独立運動の志士ファン・ボイ・チャウが日本に近代化を学ぶため、一九〇七年に十六人の留学生を連れて来日しました。その後、留学生が急増し、一時は二〇〇人以上が東京に滞在しましたが、ベトナムに進出したフランスの妨害で、この運動は挫折しました。私もベトナムからの留学生ですが、一〇〇年以上も前に日本とベトナムの友好関係があったことを大事にしたいと思います。

＊今回の地域連携プロジェクト（「岡垣歴史新聞」）で、歴史の取材や日本語で記事を書く経験を通しての感想をお聞かせ下さい。

まず今回の地域連携プロジェクトは、私にとって有意義な活動になりました。大学卒業後は、日本で就職しようと考えていますので、日本の文化により深く触れること、日本語の実践的な学びになることなどとても良い経験になりました。また岡垣町のこともよくわかるようになり、歴史や文化にあふれるこの町が好きになりました。

歴史を学ぶことはその国の文化を理解することやその国全体の理解を助けること、ひいては国際交流や国際理解につながっていくことになり重要なことだと思います。次世代に自国の文化を伝えていくことも大事です。そのことを再認識する活動にもなりました。

（平成二十八年九月　山田研究室にて）

編集後記

歴史を考える視点に「歴史観」と「歴史感」があります。学校で学ぶのは前者ですが、歴史の本当の醍醐味は「歴史感」ではないでしょうか。岡垣町には、日々暮らしている身近な郷土に古代から続く松原や遺跡（遺物）があり、鎌倉時代の伝承や戦国時代の城址、室町時代の神社や仏像など手に届くところに歴史を感じさせる地域資源が豊富にあります。ここ岡垣はまさに自然と歴史の町であり、歴史感あふれる町なのです。今回、岡垣町と九州共立大学の地域連携の一環として地域活性化新聞「岡垣歴史新聞」プロジェクトが行われ発刊となりました。学生記者は資料を片手に現地取材を徹底的に行い、頭を悩ませながら記事を書き、編集をしました。地域の方々の支援を受け何とかやり遂げた達成感を味わったことでしょう。この新聞の目的は地域活性化です。岡垣町の小中高校生には郷土の歴史を知ってもらい、大人の方には地域の魅力の再発見の機会にしていただければと思います。そして、これらの豊富な地域資源をさらに活用されて、まちづくりがさらに進んでいくことを確信しています。（山田明）